氏名	北村　尚浩
学位の種類	博士（体育学）
学位記番号	第４１号
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学位授与年月日	令和８年９月１８日
学位論文題目	中学校武道必修化における指導実践と学習体験の多層的構造に関する社会学的研究－ナショナル・アイデンティティ形成に向けた身体と文化の統合的モデルの構築－
論文審査委員	主査　森　司朗 副査　小澤　雄二 副査　栫　ちか子 副査　飯干　明

論　文　概　要

本論文「中学校武道必修化における指導実践と学習体験の多層的構造に関する社会学的研究–ナショナル・アイデンティティ形成に向けた身体と文化の統合的モデルの構築–」は，2012 年に完全必修化された中学校武道教育を対象に，国家の政策的意図と，指導現場の実態，そして生徒の学習体験の間に生じるダイナミクスを通時的かつ多層的に解明したものである．2006 年の教育基本法改正により「伝統と文化の尊重」が掲げられ，武道は伝統文化継承の核として必修化されたが，現場では専門性の不足やスポーツ化という乖離が生じている．本研究は，ルーマンの社会システム理論，ブルデューのハビトゥス論，社会的アイデンティティ理論を理論的基盤とし，必修化の導入から成熟に至る１０年余りの展開を，相互に関連する 4 つの実証研究を通じて「身体と文化の統合的指導モデル」の提示を試みている．

第 2 章（研究 1）では，武道必修化の導入過程における指導現場の構造的課題について，中学校教員への自由記述調査（269 名）のテキストマイニングを通じて分析した．その結果，「施設・設備」「用具・経費」「安全性」「指導者の専門性」といった要因が相互に連関する構造的問題（アポリア）に現場が直面していることが明らかとなった．柔道では施設と安全性が，剣道では用具や時間，専門性が大きな課題となっており，個人の努力では克服し難い物理的・構造的な制約が存在することが示された．

第 3 章（研究 2）では，指導者の専門性（客観的な段位）が主観的指導有能感および指導実践に及ぼす影響を，全国の公立中学校教員 386 名を対象とした混合研究法により検討した．段位と主観的指導有能感には正の関連がみられたが，剣道指導においては有段者であっても有能感が著しく低い傾向が確認された．さらに重要な発見として，技術指導に不安を抱く教員ほど，授業において「礼法」や「伝統文化」といった精神的・情意的価値を強

調する傾向が示された．教員は，自身の技能的ハビトゥスの不足を道徳的・文化的価値の教育によって埋め合わせる「教育的補完戦略」を採用し，指導の教育的正当性を確保しようとしている実態が浮き彫りとなった．

第 4 章（研究 3）では，学習者である生徒の視点から，武道授業の受容実態と「楽しさ」の質的構造を分析した．中学生 3,390 名の自由記述回答を対象とした計量テキスト分析の結果，生徒は武道を「伝統文化の修行」としてよりも，「技の習得」「勝敗・試合」「他者（仲間）との交流」といった近代スポーツ的な活動として肯定的に受容していることが判明した．男子は種目を問わず技術的な攻防や勝敗を重視し，女子は特に柔道において他者との身体的接触を伴う交流プロセスに楽しさを見出すなど，性別や種目特性による受容のグラデーションが確認された．しかし，このような「スポーツ化された受容」は，政策的意図である文化的理解の深化と直接結びつくものではないという課題も提起された．

第 5 章（研究 4）では，生徒の武道学習体験がナショナル・アイデンティティ（NI）形成に及ぼす影響を，中学生 684 名の量的データに基づく重回帰分析等を用いて検証した．分析の結果，「武道への好意・動機づけ（楽しさ）」は，NI の「認知的探求」および「感情的同一視」のいずれとも直接的な関連を示さなかった．NI 形成に強く寄与していたのは，「日本文化への関心」および礼儀や克己，他者配慮といった「身体的・社会的成長」の実感であった．すなわち，スポーツ的な楽しさは学習への入口として機能するものの，NI 形成という高次の目的を達成するには，身体的実践を通じた文化的理解と社会的規範の内面化への昇華が不可欠であることが実証された．

第 6 章および第 7 章の総合考察・結語では，これら 4 つの研究結果を統合し，2017 年学習指導要領改訂やコロナ禍の影響を含めた武道教育における「意図せざる教育的成功のメカニズム（制度的逆説）」を解明している．指導者は専門性の不足等から「礼法や文化」を強調し（教育的補完戦略），生徒は「スポーツ的な楽しさ」を入口に授業に参加する．この相互作用が，他者配慮を伴う身体的・社会的経験の反復を生み出し，生徒の日本文化への関心と NI 形成へと結実する動態が導き出された．ただし，本研究は文化偏重による「礼法中心主義」の形骸化を戒め，技能習得と文化的理解を往還させる学習プロセスの不可欠性を強調する．本研究は，この一連のプロセスを「身体と文化の統合的指導モデル」として提唱し，スポーツ的な動機づけを起点としつつ，身体実践と文化的理解を往還的に関連付けながら学習を深める教育実践の重要性を結論づけている．

論 文 審 査 の 要 旨

本学位論文は中学校武道必修化における指導実践と学習体験を、政策・制度的次元（マクロ）、学校・実践的次元（メソ）、個人・経験的次元（ミクロ）の多層的構造からとらえ、ナショナル・アイデンティティ形成に向けた身体と文化の統合的モデルの構築を提案する社会学的研究である。著者は、中学校武道必修化の導入から成熟に至る10年余りの展開を、相互に関連する４つの実証研究を通じて「身体と文化の統合的指導モデル」の提示を試みている。研究１（メソ）では、学校武道必修化の導入過程における指導現場の課題構造について、「施設・設備」「用具・経費」「安全性」「指導者の専門性」といった要因が相互に連関する構造的問題（アポリア）に現場が直面していることが明らかにされた。研究２（メソ）は指導者の専門性（客観的な段位）が主観的指導有能感及び指導実践に及ぼす影響を検討し、教員は、自身の技能的ハビトゥスの不足を道徳的・文化的価値の教育によって埋め合わせる「教育的補完戦略」を採用していることが示された。研究３（ミクロ）では、生徒の自由記述データの分析を通して、中学校における武道授業の受容実態と「楽しさ」の質的構造を分析した。その結果、生徒は「伝統文化の修行」としてよりも「技の習得」「勝敗・試合」「他者（仲間）との交流」といった近代スポーツ的な活動として受容していることが判明した。研究４（ミクロ）では、学校武道授業における学習体験とナショナル・アイデンティティ（NI）形成の関連を検討した結果、スポーツ的楽しさは学習への入口として機能し、NI形成には身体的実践を通じた「日本文化への関心」と礼儀作法や自己規律、他者配慮を含む「身体的・社会的成長」の統合的経験が必要なことが実証された。

以上、本論文では、これら４つの研究結果を統合することによって、武道教育における「意図せざる教育的成功のメカニズム」が解明され、その結果、スポーツ的な動機づけを起点としつつ、指導者の意図的な文化的問いかけを介して身体的実践を文化的理解へと接続させるプロセスからなる「身体と文化の統合的指導モデル」が提唱されている。本研究で得られた知見は、今後の武道教育の指導の在り方に関して重要な示唆を示すものであると同時に、学校体育の中に武道教育が導入されてきた意義を示していると考えられる。

上記の研究結果から、本論文の内容は博士（体育学）の学位論文としてふさわしいものであると判断する。